

二〇二三年一月八日

餅食べて戦後の日々を語り草

宏 虎

信 楽 や 狸 の 首 に 門 飾

素 秀

焚初の菊炭窯に神酒注ぐ

凡 士

指示棒の氣象予報士まず御慶

うつぎ

初稽古片肌脱ぎに弓を射る

凡 士

寄す波に堪ゆる礁の夕千鳥

素 秀

歳末やパズルの様な駐車場

よう子

花鋏研いでそれから年用意

む べ

晦日蕎麦お疲れさまと二人卓

かかし

初鶏の鳴くをうつつに二度寝かな

素 秀

菰巻かれ老松天へ傾きぬ

愛 正

投句日記す花丸暦果つ

かかし

モノクロの夢より醒めて雪明り

うつぎ

数独に耽けて跨ぎぬ去年今年

こすもす

毎週句会秀句・みのもる選・二〇二三年一月九日

ねんねこの母のうなじに涎あと

よう子

ヘアサロン百寿の母に年賀状

凡 士